

**Margret Wibmer**

**ambiguity**

**bodies objects and spaces**

マーガレット＝ウィブマー

不確かさ

身体 機械 スペース

## 人間と関係をもつことのできるオブジェクト

今回日本に旅立つ前にオランダで、「See」というデザイン専門誌に載っていた文章を読みました。それは日本の経済産業省のデザインポリシーディレクター代理、高木美香さんの書かれたもので、内容は日本人の感性と感性の役割についてでした。それによると、私達は製品に触ったり感情移入したりする事で、製品の作り手側がそれをデザインするときどのような考え方でそれを作ったか、ということを知る事ができるそうです。また、今日消費者からは、製品の素材の完成度はもちろん、それぞれのデザイナーのデザインする時の感性や考え方の質も求められている、とのことでした。これは、物語性を付加価値として製品に与えるという事だと思います。この考えは、私の「the girl and her object」シリーズを日本で述べるにおいて参考になるものでした。この作品シリーズは、私達「人間」と「機械」との関係性に対する疑問が基になっています。私は作品の中で、機械と人間の組み合わせを撮影しています。私が興味をもっている機械というのは、例えば身体を発展させたようなもの、姿勢や体の認知の仕方に影響を与えるようなものです。オーディオ機器やコンピューター、あるいは家電や、体の治療につかわれる医療機器のようなものです。私がそれらを使つての制作を考えた時、すぐに思い浮かんだのは、新しい機械ではなくて今とは違う時代のもの、古い電化製品でした。その理由はいくつかあります。一つは私達がかかっている現代の機械にはあるような、既にあるイメージ、既成概念を取り外したい、という事です。アーティストとして、人々が作品からいろいろな疑問点をもってもらいたいし、作品に対して、これは一体何だ、いつの時代で何に使われていたのか、なぜこの機械なのか、などを考えながら写真の前で長く立ち止まって考えてもらいたいのです。



‘surprise No. 1’ 2006. lamdprint on Dibond 80 x 80 cm



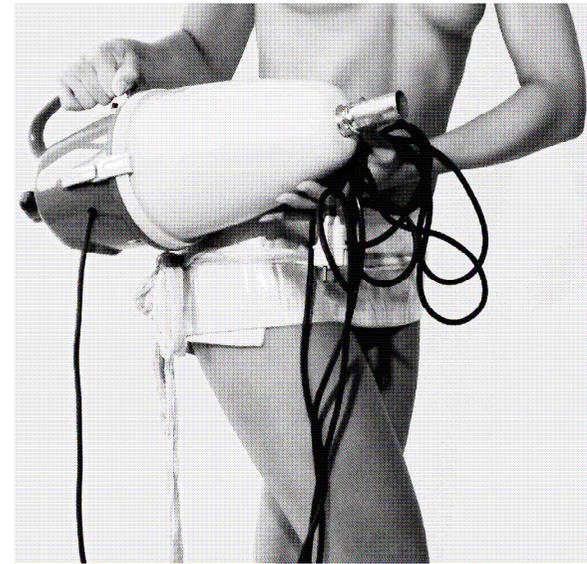
‘my one and only’ 2005. cycleprint on German Etching paper 50 x 50 cm

二つ目の理由は、昔の電化製品と今の電化製品に対する作り手の考え方の違いです。日本の昭和の電化製品をとってみても、今の時代とは違った考え方で、より丁寧に、気を使いながら形や MATERIAL やテクスチャーが用いられていることに気づくことがあります。それらは時代を経て持ち主の感情が伝わり、使い込んだという感じが物に移っているようにも感じられ、それを写真に使う事によっていろんな意味合いが増す事に気づきました。

「人間と関係を持つことのできるオブジェクト」と、1954年にリジア＝クラークというブラジルのアーティストが彼女の作品について語っている言葉が私はとても気に入っていて、この言葉は経済産業省高木美香さんが語っていた、デザインや、人と物との関係性への感情移入といったことと同じような意味合いがあるのではと思います。また、カナダのフェミニスト、ダナ＝ハラウェイは“サイボーグ宣言”において、「携帯、PC、インターネットを用い、機械と生きる私たちは皆サイボーグだ」ということを言っています。



‘reflection’ 2005 cycleprint on / auf German Etching paper 60 x 60 cm



‘rehearsal’ 2005 cycleprint on / auf German Etching paper 60 x 60 cm

## 女性について

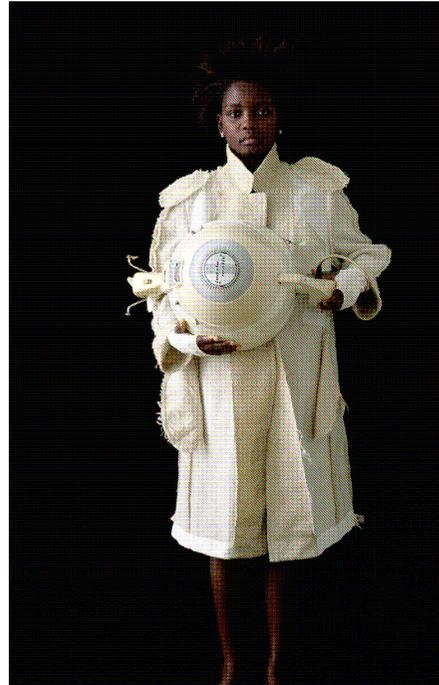
上の2つの作品では、特に女性や女性の体が電化製品を紹介するときによく使われている事に対する、ある種の疑問を表しています。

全部がそうとは言いませんが、多くの製品が魅力的な女性を広告使って明らかに気をひこうとしています。電化製品を見せたいのか、女性を見せたいのかと思う事がしばしばあります。女性が犠牲者だといいたいわけではないのですが、それに対するちょっとした反抗心から、私が作品の中で見せたい女性達というのは強くて鍛えられた体を持っています。掃除機を持ったこの写真は家庭の主婦というよりは兵器をもった戦士のようにみえることでしょう。私は若い女性をモデルにすることによって、機械と対照的に見えるように心がけています。

また、若い肉体に対する関心の高さについての疑問もこの作品には隠されています。この地球の環境はどうなっていくのか、どうやって地球を救うか、私達にすべき事は何か、ということを考えるときにも、若さを保つ事や、長く生きながらえる事に皆さんの関心が多くいくということがありません。私はよく写真には友人や身内を使います。メインのモデルは娘です。

### 衣服とそれが表すもの

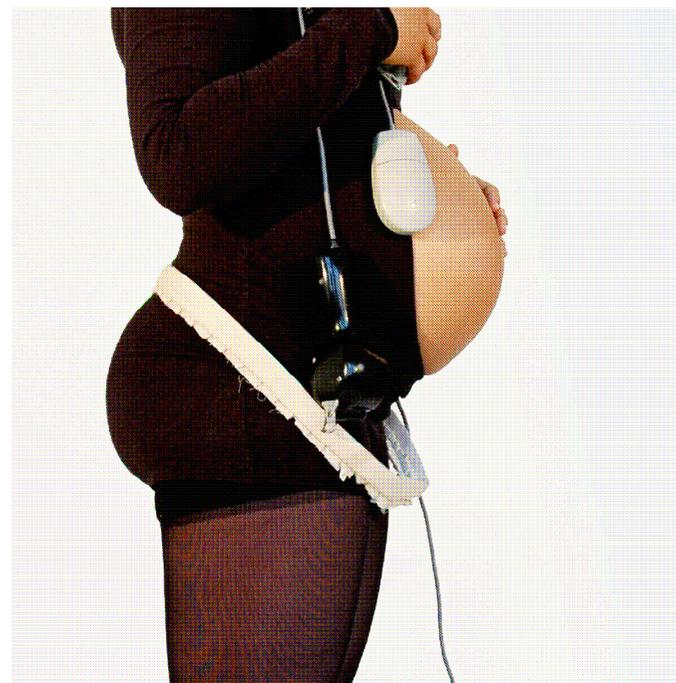
また、モデルにはわざと、ありきたりなポスターのポーズをとらせることにしています。それは作品を見る人がポーズについて意識することのないように、という理由からです。ここに、2枚の写真があります。女性がポジションを変えて撮られています。私の動きに対する考え方や、着ているものについての考え方がここに含まれています。女性の肩についているショルダーパッドはコートの中に付いているもので、つまり、これはコートが裏返しになっているのですが、このタイトルのプロペラというのはこのぺらぺらしたパッドから着想をえました。また、裏返しにすることで、何か偉い将校のようにも見えて、そうなるを持っているのがなにか戦争で使う兵器のようにも見えるということがあります。このように私の作品は、着ている洋服がどのように見えるかによって持っているものの見方も変えてしまう、ということをよくします。



‘the girl and her object I & II’ 2005 lamdaprint on / auf Dibond each / je 34 x 50 cm - Ed.10

### オブジェの形からの考察

次の作品は形とその形がもつ意味について考察した作品です。左の写真は、写真の拡大機ですが、拡大機というものはイメージを拡大して再構築させるものです。これをヘッド「頭」と名づける事にしたのは、頭もまた、物事を考えて再構築させるものであるからです。これを女性に両手でとても大事そうに持ってもらっています。右の写真は妊婦さんなのですが、タイトルはマシンメモリーといいまして、「機械の記憶」というものです。これは妊婦さんを赤ちゃん作りの機械のように見立てています。ぶら下げられたコンピューターのマウスは、病院で妊婦さんのおなかに当てて赤ちゃんの状態を見る超音波の機械になぞらえています。また、マウスの横でぶら下げられているのはマイクです。これらはコミュニケーションのツール・回路のようなもので人間の体の延長線上にあるものだと考えます。



from the archives / aus dem Archiv: from the series / aus der Serie rehearsing natto – 2008

'machine memory' 2008 lambda print on / auf Dibond · 80 x 80 cm · Ed. 5 + 1 AP

## ファッション

次の2枚は、ファッションと洋服についての私の作品です。私は布地の持つ素材の風合いや、洋服の作られ方にとっても興味があります。ファッションについての私のような作品は、他にはありません。それはたとえばファッションデザイナーやファッション雑誌のための写真とは考え方がちがっているものです。私にとっての洋服というのは人の体や、物体や、それを取り巻く環境についての考え方を現し、ファッションの表層のようなものです。作品の中に出てくるいくつかの洋服というのは私がその作品のためだけに作ったものです。ときには洋服の切れ端も使います。多くはマテリアルやテクスチャーが興味深いもの、文化的や歴史的背景を持つものです。また時には個人的な思い出がある布も使います。例えば右の写真の‘l.e.a’という作品では、グレーのスライドプロジェクターは帽子の様なものを被っていますが、これは私が小さい時に母につくってもらったケーブなのです。また、左の女性が腰に巻きつけている帯は私の娘が日本人の祖母からもらったものです。



‘reflection’ 2005 cycleprint on / auf German Etching paper - 60 x 60 cm



‘l.e.a’ 2007 metal, fabric, plexiglas, fur 21 x 82 x 26 cm (8 x 32 x 10 inches)

## 機械と服



'myra' 2007/2010 · metal, fabric / Metall, Stoff · 21 x 101 x 21 cm

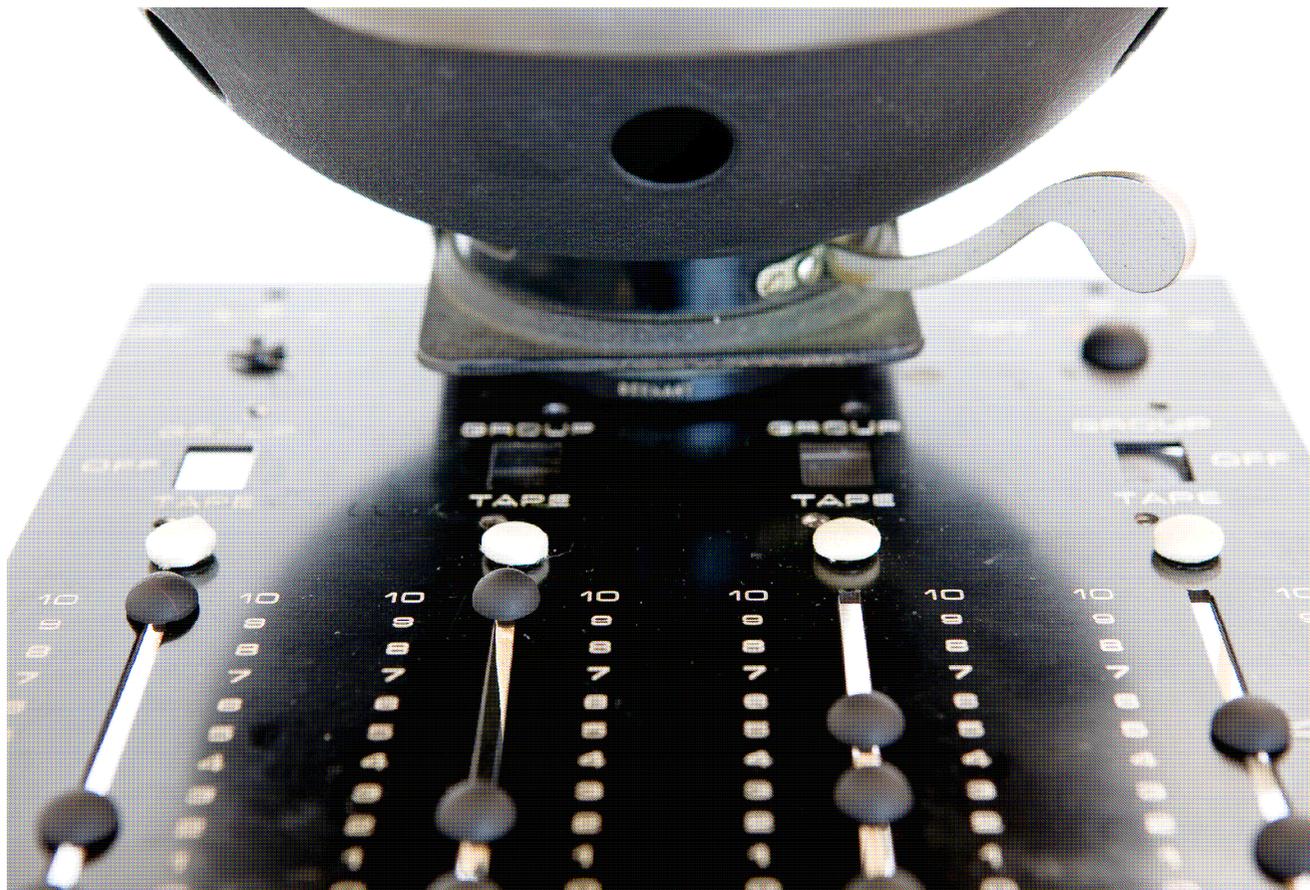
上の写真の「myra」という作品に使われている、黒いプリーツ状の素材は伝統的なオーストリア(私の母国)の布のイメージです。スカートはウールのプリーツ素材です。ここでは布がマイクの金属の足を覆っています。これは、このプリーツの布が『声』を閉じ込めている、という意味合いを持ちます。マイクは人間のように立っています。

### タイトルのアイデア

ここにも、ドレスアップした機械の例があります。この作品は写真の拡大機がもとになっていて、タイトルは「なっとう」といいます。なぜこのタイトルをつけたかという、私の娘がこれは日本のアニメの『忍者ハットリ君』と似ている、といった事から、その発音が「なっとう」と似ている事、そして納豆は私達からしたらとても奇妙な、糸を引く食べ物だということから、この名前をつけました。このたれさがっている紐のようなものはやはり、娘の祖母の帯からとってつけたものです。先のほうにオーディオ機器のつまみと、シルクのボタンがついています。



‘natto’ 2008 metal, fabric, foam rollers / Metall, Stoff, Schaumstoffrollen 20 x 160 x 45 cm



これはサウンドミキシングパネルの拡大写真ですがよくみると、つまみの部分がシルクのボタンになっているのがわかるでしょう。私の作品はよくとてもコンセプチュアル(概念的)といわれます。確かにそれはひとつの概念にもとづいているかもしれませんが、多くはとても即興的に思いつくもので、想像力のお遊びというべきいくつかの切り口があります。それは素材を知る事や文化を学ぶ事や、哲学や、素材の学習などから引き出されたものだと思います。ダダイズム的な考えが根底にあるかも知れません。



'a day in july' 2005 metal, wood, fabric / Metall, Holz, Stoff - 139 x 18 x 20 cm

### 機械と服の意味するもの

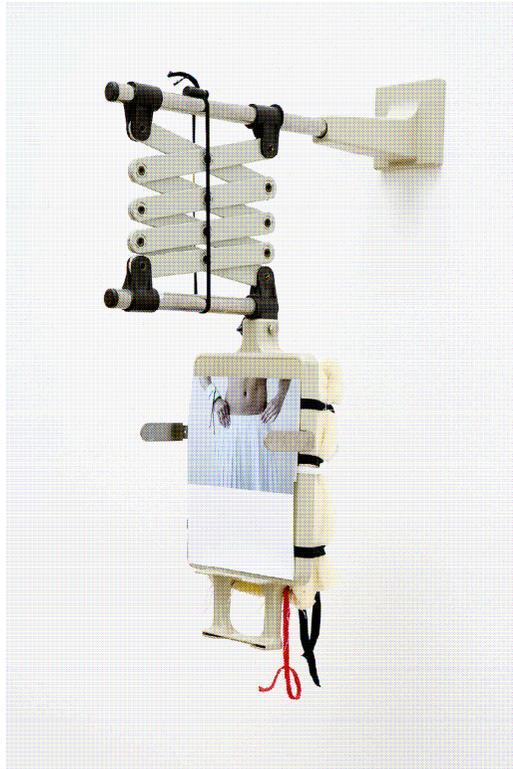
この作品は私が布の素材と、機械を組み合わせで作った作品の例です。白いプリーツスカートはしばしば私の作品の中に現れます。これは「無垢」を表しています。'a day in july' と名づけられたこの作品は金属と、穴の空いた木のパネルでできています。白いスカートは「少女」を表します。これはアムステルダムの仕事場で、とても気持ちのよいお天気のどこからか水の流れる音のするような日に、ラジオから BBC 放送による戦争についてのニュースが流れてきたことをきっかけにつくった作品です。そのラジオが、私にはあまりにも抽象的に聞こえてしまいました。私は戦争の被害にあったことがなく、それは幸運なことです。しかし世界にはそのような現状に晒されている人々がいるという事に触発されてこの作品をつくりました。パネルの穴は銃痕を表しています。足の部分は銃口です。これは半分機械、半分人間のサイボーグです。犠牲者と残酷さの対比を表します。



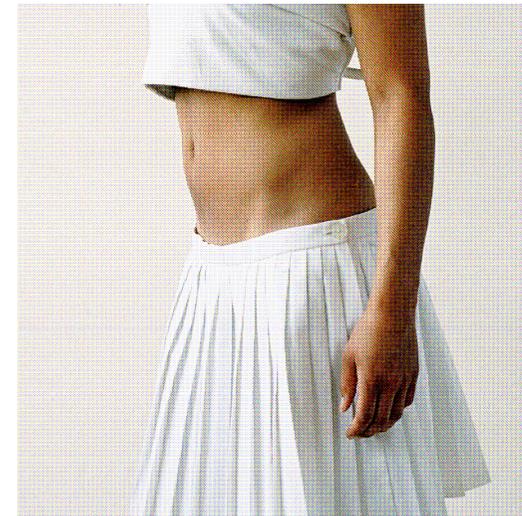
'collage with a detail from / Collage mit einem Detail aus a day in july' 2005 and / und ausflug 2 - 2004 - lambdaprint - 19 x 25 cm - Ed. 10

上の2枚の写真は私の今月末に出版される、新しいカタログから取ってきたものです。

これは先ほどの'a day in july.という作品の一部分と、水力発電所で行ったパフォーマンスの「服を着る」行為の写真です。



'5 p.m.' 2005 - plastic, metal, fabric, digital print on paper /  
Metall, Stoff, Digitaldruck auf Papier - 20 x 62 x 32 cm



'measurements' 2005 - lambdaprint on / auf Dibond -  
50 x 50 cm - Ed. 5 + 1 AP

これは同じプリーツスカートなのですが別の作品で「5 p.m.」というものです。左の機械は古い電話を置くためのもので、機械の部分が伸び縮みするようになっているものです。かかっている写真の女性は秘書で、「もう5時だ」と上司に文句を言っています。ゴムのようなベルトで縛られています。これは束縛を意味し、赤いリボンがついているのはある種の「からかい」を意味します。ジグザグの部分が縛られているのは最大限のテンションを意味しています。

## パフォーマンス、インスタレーションへの興味

ダンスやファッション、また音楽への興味から、私は実験的なインスタレーションパフォーマンスを企画し始めました。ここでは、オーストリア、インスブルグの「クンストパビリオン」でのパフォーマンスを紹介します。

この作品のタイトルは「holding」です。ここでいう「holding」は本来の「抱える」、「持つ」とは違った意味を持ちます。今回は、この「holding」が病院のある場所で使われていたことに興味を持ったところから使われました。病院で、何かしらの処置を受ける前の部屋。待機所に、この「holding」という部屋の名前が付けられていました。そこではあなたの順番がくるまで、待たなければなりません。そこで私達は自分が呼ばれるまで、とても不安な、不確かな感情のままいなければならない、そんなことからこのタイトルをつけました。以下はこの体験型パフォーマンスに参加した、キュレーターのEmilie Oursel氏の文章を引用します。

私はおそろおそろクンストパビリオンの中にはいった。そこでは目的も知らされず、黒いコートをはおらされた。それは床に着きそうなくらい長く、ウエストのところをベルトで閉める形。一度も着物を着たことはないが、日本の帯をおもわせるようなものだった。それは戦闘服のベルトのようでもあり、拳銃をつりさげるための皮ベルトのようでもあった。そでにはひもがついていて、マジックテープでとめるようになっていて、血圧が図られているような感覚で、頭にはヘッドギアのようなものをかぶらされた。これはハンカチーフのように結んだり、いろんな形に変形して結ぶことができた。最後にサングラスをかけられ装備は完了した。私は一人の匿名者のように、あるいは不審者のようになった。外から見ると、それはまるでファッションショーか、何かの宗教の儀式のようでもあり、また、クークラックスクランの信望者かあるいはなにか不思議なカーニバルのように見えることだろう。衣装の素材はそれが黒い色をしていて、重そうにみえるにもかかわらず、実は軽くて、形がフレキシブルに変わる、いわゆるスマートマテリアルと呼ばれる形状記憶素材を用いている。これによって形は自由に変形できて、体にフィットさせる事もできるし同時に自由自在にもりあげたり、ひっぱったりもできる。主婦のハンカチーフか、お坊さんのかぶりものようだったりする。このような格好をしたわれわれはどこか仮想現実バーチャルリアリティーの世界からアバターとしてこの現実の世界に来てしまったようだ。スピーカーが天井に設置されていて、女性の声で、指示がでる。たとえば、お尻を緩めてリラックスしてください、だとか、あなたの従業員を監視してください、だとか、太陽の日差しからあなたを守ってください、とか、なにか、治療者があなたに何かを指示しているような言葉が聞こえてくる。デパートの消費者のためのメッセージとか、お医者さんがあなたに何かを指示しているようなメッセージで、いったい何をしたらよいのか不安になる。

いづれにしてもそれらの言葉はあまり大した意味のないことばで、整合性はない。また、5つのスピーカーから流れてくる声には規則性はなくて、不規則にいろんなスピーカーが指示し、それが一定ではないようにプログラミングされていて、参加者がどのスピーカーはどの声の命令、とかを判明することはできないようになっている。中にいる人は何の仕掛けなのかと不安になり、かく乱し、混乱したりする。

**Emilie Oursel** This text was written on the occasion of the exhibition *natto* at Lumen Travo Gallery in 2007.

この作品の中で私は人々に、何か目的を持つ動きや、こうやったらこうなるとかいった日々の動きにはないような動きを、人々にさせたいとおもいました。これはコミュニケーション不在のスペースであり、アーティストの私自身もその中に入って見て、人々が不確かな動きの中でまるで彫刻のように見え、オブジェになったように思ったということです。

これは私が作品の写真の中で、機械と人間のコントラストを撮影したのと同じ考え方で、機械の代わりに服を着ることによって、人々自身もオブジェ化してしまおうというようなアプローチでした。



from / aus dressinstruction for the holding



from / aus: dressinstructions the holding - material / Material: shape memory fibers

### 服について

この服の型紙は着物の形状を模しています。その理由として、この服によって体が包まれるようにしたかったこと、シンプルで着心地がよく、余計な装飾がないことがあります。また、この服は形状記憶素材でできており、サイズも1サイズです。これによって、大きい人でも小さい人でもどんなサイズの人でも体にフィットしますし、いろんな形に変えることができます。また、体の線も明確にわかります。もし、シルクや他の素材を使っ  
て、同じ物を作ろうとしたらそれは体を隠してしまうし、ほとんどのひとは大きな袋のように見えてしまうことでしょう。この素材のもうひとつの利点は、特に頭を覆うヘッドギアの部分がいろいろな形に変化させられるということが挙げられます。

また、ウエストの部分のベルトにもある意味が潜ませてあります。

私はゴム製の巻きもののような装飾をつくってみました。これは最近の政治的な事件から連想してつくったもので、自爆装置用のホルダーに似せてベルトにくっつけています。この無垢なマテリアルは、布地の色、音、下界から遮断された環境であることなど、いくつかの要素が重なった状況で意味を持つのだと思います。



from / aus dressinstruction for the holding



from / aus dressinstruction for the holding

衣服とわれわれがそれを見に着けることは、個人の社会的な位置付けと文化的背景を表します。衣服を通してわれわれはコミュニケーションし、いろいろなメッセージを伝達するのです。私は衣服の持つ「意味合い」で遊びたいと考えます。



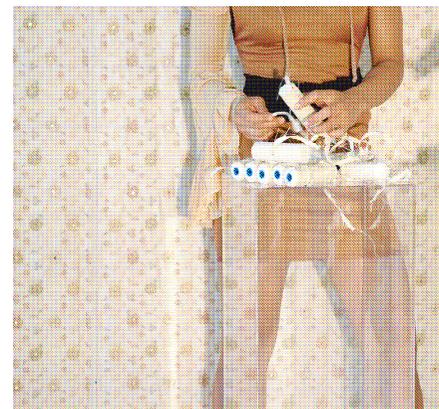
from / aus dressinstruction for the holding

西洋文化では、個人の自由と意見が尊重されることがとても重要だと考えられています。しかしながら公共の安全性の観点から、どこまで個人の自由が公共のスペースでコントロールされるべきかということがしばしば議論になります。

この作品のなかでは、「コントロールされること」に関するいくつかの素材をもちいました。例えば、ユニフォームに見立てた衣服を着てもらふこと、スピーカーから「あなたの目を正しい位置でリラックスさせてください。この心地よい温度を楽しんでください。そして必要な防災用具をすべてもってきているかどうか確認してください。」などという声をうるさく流す事などです。

## THE TAILOR

次に私が近い未来に考えている作品のことについてお話します。これはインスタレーションでタイトルは「the tailor」(仕立て屋)というものです。この作品はまだ制作途中なので、これまでに考えている基本的なコンセプトだけをお話しようとおもいます。素晴らしい職人である「仕立て屋」はほとんど、姿を消しつつあり、その仕事はファッションデザイナーにとって変わられています。私は仕立て屋の社会的な役割に注目して、この人物像を神話的なものとして使おうと考えました。この新しいパフォーマンスインスタレーションは、やはり実験的なサウンドスケープが必要です。「俳優」がユニフォームのようなものを着て、なにやら生産する場所に配置されます。そこでは手作業によって何かが作られておりそれはまるで何かストレッチのようにも見えます。観客がその中へ進んでいくにつれて、違った音が鳴るようにします。これは気持ちがよいと感ずる音、あるいは何か変わった空気をかもし出すものであり、音の違いによって観客は違ったムードになるようにします。「仕立て屋」は観客を中に誘導するように仕向け、観客はこの出来事の一員となります。彼らはしばしこの出来事の「参加者」か「会社側」になるか、あるいはまた「見学者」になるか選ぶ事になります。このインスタレーションは美術館の中で行われることを想定して作っています。このような仕事はいつもコラボレーションによって作り上げなければなりません。私はいつも音楽家達や、サウンドエンジニア、照明デザイナーや、新しい科学的で実験的なファブリックや布地のデザイン従事者と仕事をしています。この作品が日本で実現できたらよいと考えます。なぜなら日本には私の持っている文化背景にはないものが埋蔵されているに違いないとおもうからです。例えば日本人の動作とか、人にもものをあげる手つき（例えば名刺を渡す仕草、ものを静かに置く仕草、箸を並べる仕草など）他者にたいする礼儀の態度や、儀式的な要素が日本の文化にはあると確信しているからです。



‘THE TAILOR’

## 再構築

次の作品は 私達個人と公共との間の、肉体的な状況と関係性における役割についてのもので、「再構築」というタイトルをつけました。去年中国を初めて訪問し、NYのような巨大都市に住んでいた経験があるにもかかわらず、北京や上海のような大都会のランドスケープが脅威に思えました。まず初めに巨大なビルが私を打ちのめし、次にやっと人がいることに気づいたというわけです。すべてのアジア人が私より壊れやすいという意味ではなく、肉体的見え方は明らかに西洋人と東洋人とは違っていて、この巨大なビルと、壊れやすいアジア人とのコントラストが、生活の哲学や存在の意味において、われわれ西洋人の二元論的な考え方とは根本的に違うのだ、と興味深く考えさせられました。アートグミの展示の後、中国と韓国に向かうので、またこの仕事に関して発展させて考えるつもりです。



from / aus reconstruction · 2010 · digital collage / digitale Collage · design for an interactive projection / Entwurf für eine interaktive Projektion



'melt down' 2010 - digital print on / auf Fine Art  
/ auf Dibond - 90 x 80 cm - Ed. 5 + 1 AP



'hilton' 2010 - digital print on / auf Fine Art Paper on  
Paper on / auf Dibond - 85 x 80 cm - Ed. 5 + 1 AP



'APcctv ' 2010 digital print on / auf Fine Art Paper on  
/ auf Dibond - 110 x 80 cm - Ed. 5 + 1



パフォーマー山下きよみとのコラボレーションとラジオとのリンク



公演 2010.10.16/ 'VICTORS BRIDE' 2010, installation and setting for performance; 30 radio's from Showaperiod, a Victor phonograph, some other equipment, cables

さらに力を入れたのは、16日のダンス公演です。以前日本の「舞踏」を見たことがあり、日本に来るならば舞踏家と一緒に作品を制作してみたかったという夢が1つ、実現しました。金沢の舞踏家山下きよみさんを紹介してもらい、写真や動画を送ってもらい話し合いながら内容を決めていきました。きよみさんには写真のモデルにもなってもらっています。

パフォーマンスはラジオ番組とのリンクする、という大きな課題に挑戦しました。金沢市内のラジオ局、北陸放送の協力にて、川瀬佑子アナウンサーの「サウンド・カフェ」番組を山下きよみの舞踏と私がアートディレクションを行った舞台の中に取り込むというものです。このようにライブラジオの番組とのリンクは前から実現してみたかったことで、ドイツでは出来なかったことをここ金沢で実現できて嬉しく思います。

また、今回サウンドコーディネーターの蓑輪さんとサウンドエンジニアの森さんに音作りをお願いし、ヴィンテージラジオをひとつひとつ状態をチェックしながら音の出具合を調整していただきました。公演の音は、NYの私の友人であり、作曲家のRobert Poss氏の音を蓑輪氏がサンプリングし、また、森氏の技術で音をトランスミッターにて飛ばしながらラジオに語らせるという手法をとりました。アートグミでは、多くの市民のみなさんより、ラジオについてのインタビューの声を集めました。たくさんのラジオにまつわる思い出があつまり、それをまたパフォーマンスに引用し、ラジオより流す事になりました。番組内容は当日まではっきりとは知らせられず、リクエスト音楽の始まる時刻のみお互い申し合わせるという形で、30分間のラジオ番組をいかに取り入れてパフォーマンスとマッチさせるかが大きな冒険でありました。また、今後のための資料として、本番のパフォーマンスを撮影する事が必要でした。これは(株)FIXの春木さんのチームが取り組んでくださいました。また舞台の照明には東京より、小平氏がかけつけてくださり、照明をしてくださいました。ご協力をいただいたみなさまに、さらに感謝いたします。

今まで日本に対するイメージというものはありませんでしたが、実際に来ることがなければそれらを作品に反映させながら制作をすることはできませんでした。非常に貴重な経験だと思っています。金沢で制作した作品はヨーロッパでもまた、発表できる機会があると思います。新しい作品を作る機会を与えてくださった事を幸せに思います。アートグミの皆様、中森あかね氏には多大な協力をいただき、また、たくさんの彼女の友人達にもサポート以上のことをしていただきました。感謝いたします。私はこの文化的交流をヨーロッパの人々のもとに届け、多くの未知の人々が日本の文化に興味を持つ機会が与えられることを確信いたします。

2010年10月16日 金沢にて Margret WIBMER